

[研究会報告 3]

ツツバ語の名詞句・名詞句表現に関する考察¹

内藤 真帆

1. Personal pronouns

ツツバ語にはオセアニアの他の言語同様、単数、複数、双数、三数の指標が用いられている。これらはそれぞれ一人称、二人称、三人称に分けられ、特に複数以上の数では一人称が包括形と排除形に分けられる。

表 1.

		Independent Pronouns	Subject Pronouns			
			resent/past	future		if/must
				state	question	
Singular:	1SG	nao	nno	Ka	ka	ka
	2SG	nno	o	e	o	e
	3SG	nna	mV	a	a	a
Plural:	1 (INC)	inda	do	da	da	da
	1 (EXC)	kaman	ko	Ka	ka	ka
	2	kamiu	ko	me	mo	me
	3	nira	ro	ra	ra	ra

表の 1 をもとにし、一人称単数を主語とした場合どのように文が構成されるかを表の 2 に示した。それぞれの数字は文の構成要素である独立主語代名詞、動詞などのあらわれる順序を示したものである。

¹2003 年 12 月 12 日発表。

スロット 1 の位置には未来、仮定を表す will, if に該当する語があらわれ、それに後続してスロット 2 の位置に主語独立代名詞があらわれる。2 の主語独立代名詞は往々にして省略されるが、次のスロット 3 の位置にあらわれる主語代名詞により主語を特定することが出来、これが省略されることはない。完了相、否定の接語を不要とする文では主語代名詞 (スロット 3) に動詞 (スロット 5) が後続するが、完了相や否定の接語などが用いられる場合、これらはスロット 4 の位置にあらわれる。

表 2.

	1	2	3	4	5	6
		Independent pronoun	Subject pronoun	Aspect marker	head	
Present,past		nao	nno		loso	
			nno		loso	
Future	ae		ka		loso	
If	ar		ka		loso	

注： loso ‘to bathe’

アスペクト接語:

Slot 4 否定 ‘te’ 進行 ‘lo’ 未完了 ‘telo’ 反復 ‘le’

Slot 6 完了 ‘mef’

ar Mathew a ma nambar
 If Mathew SP:3SG come today
 ae afo ka te fano
 will tomorrow SP:1SG NEG go
 ‘If mathew do not come today, I will go tomorrow.’

2. Numerals

Morphemes

e-tea ‘one’ e- 数 -tea 具体的数 (1, 2…10)

Ordinal(序数) は基数に三人称単数の所有代名詞接尾辞-na が付加してあらわされるが、1 と 1000 は例外となる。また、Distributive(分配) は具体的数を表す形態素部分

が一部重複し、接尾辞-I が付加してあらわされる。

	Cardinal 基数 (one, two…)	Ordinal 序数 (first, second…)	Distributive …ずつ (one each, two each)
1	e-tea	e-tea	e-te-tea-i
2	e-rua e-rua-na	e-r-rua-i	
8	oaru	.	o-oal-i
10	sangafulu		sangaful-i
11	sangafulu doman etea		.
20	ngaful-e-rua		.
100	ngalu-sangafulu	ngalu-sangafulu-na	.
1000	tari etea	faa-sangaful-na	
.	etc.	etc.	

3. 3. Counting

例えば 234 は次のように数えられる。

faa-rua	faa-tol-na	ngaful-e-tol
hundreds-two	hundreds-three-P:3SG	tens-E-three
200	300th	30
gaful-e-fati-na	e-fati	
tens-E-four-P:3SG	E-four	
40th	4	

しかし次のように短縮することもできる。

234			
	faatol-na	ngaflefati-na	e-fati
	three hundred-P:3SG	forty-P:3SG	E-four
	300th	40th	4

Relational nouns

以下に示すのは人、物、空間の部位をあらわす名詞表現である。内側、正面、上、下など、場所をあらわす語は多くの場合、属する人や空間名詞への結びつきを意味する-n という接尾辞を伴う。場所を表す語の前後いずれかには na という前置詞が置かれるが、これは前置詞句において全ての用途で用いられる。

A: Verb na location-n noun

B: Verb location na noun

次に挙げるのは動詞 eno 'lie' が用いられ、場所を表す語が異なる二文であるが、①はタイプ A、②はタイプ B である。これより、A, B を規定するのは、動詞ではなく場所を表す語であると考えられる。

① firiu bula-ku me eno na ruirui-n tebo
dog LINK-P:1SG 3SG lie PP under-LINK table
'my dog lay under the table.'

② nna lo eno fare na imai(*...eno na fare-n imai as type A)
he TA lie outside PP house
'He was lying outside the house.'

次に示すのはタイプ A とタイプ B の一部である。

Type	Locations	Tutuba
A	in, inside	lolo
B	outside	fare
A		burui
A	under	ruirui
B	avobe, top	aulu
A	behind something	kare
	Someone	kula-P
A	beside	tafalu

参考文献

- D. Jauncey. 1997 A Grammar of Tamambo, the Language of Western Malo, Vanuatu. Unpublished PhD thesis, Australian National University.

質疑応答（敬称略）

伊藤（コメンテーター）：数詞の表現は、例えば20以上の2桁の数字を言う場合に10の位から言うか1の位から言うか、また階数を言うときに1階というのが地面とつながった階を指すのかそこから1つ上がった階を指すのかなど、言語によって差がある。このツツバ語の数詞表現は一見非常に複雑ではあるが、興味深い。人称代名詞について、独立主語代名詞は省略可能とのことだが、その省略の頻度はどのくらいなのだろうか。

内藤：話し手と聞き手の両方に主語が明白である場合はほぼ省略される。ただし主語が強調される場合は省略されない。

向山：カトラーは、present と past というメンタル・スペースに fact という属性を与え、future というメンタル・スペースには prediction という属性を与えて概念を区別している。希望、意志のような desire にあたる部分は現在における prediction として2つのマーカが重なる英語のような言語もあると述べている。それに照らしてみると、この記述はちょうどその区別にそって文法的なマーカが当てはめられているのが興味深い。imperfective に関して、これを imperfective と呼ぶのは適切でないかもしれない。むしろある時称の内側に視点があるような場合に imperfective というのが一般的である。te と lo で否定の形態素と考えることはできないのか。

内藤：初めはそのようにも考えたが、そうするとインフォーマントの説明と合致しなかった。進行形の否定形が判然としないこと、未完了を表す発話に必ず telo が生起していたことから、今回は未完了とした。しかしご指摘のとおり、今後 imperfect に関して考察する必要性和進行形の否定形を調査する必要があると思っている。

森岡：数詞に関して、8だけ数を表す接頭辞 e-が見つからないのはなぜだろうか。

内藤：接頭辞 e-が見つからない理由はまだ分からないため、今後調査を続けたい。

森岡：e + o + a という3母音の連続というのがツツバ語では起こりえず、そうなる場合には-eが脱落するという現象が他の単語を拾ったときに観察できる可能性がある。母音の3連続ということに関して、データを集めてみると面白いことがわかるかもしれない。それから location の表現に関して、場所が特定のな場合と不特定のな場合で区別があるように思われる。

内藤：3重母音には、iao、iea の2つが観察できたが、eoa という形はなく、もしかするとその形を回避するため e が脱落するのかもしれない。今後のデータ収集の参考

にしたい。location に関してはそのような観点から分析したことがなかったので、今後多様な観点から調査を行うよう心がけたい。

李： 指示詞は全部でいくつあるのか。

内藤： 人称代名詞は 15 個あるが、指示詞は日本語のこれにあたるものに関していくつ、それについていくつ、というように表現は複数あるようだ。手に持っているもの、目に見えるもの、見えないものなどによって区別があるかもしれないと今回の調査で感じたが、正確にはまだ分からない。

李： 目に見えるもの、見えないものという区別があるとすれば興味深い。指示詞の体系的な記述も目指してほしい。

三谷： 人称代名詞の派生関係について考えていることはあるか。

内藤： 1 人称単数の present、past については有標形であろうと考えている。それ以外はほかの複数・双数などと合致して /k/ が発音されている。複数の exclusive の /kam/ という部分が双数、三数の 1 人称の exclusive と合致することから、それに数を表す形態素が付加したと考えている。本来ならば /k/ で現れるところが単数の場合のみ /n/ に変わったのではないだろうか。

三谷： 数詞は、0 番台を含めているのであろう。100、1000 のように大きな位はあとから作った形で、もともと使わないためになかったものが、後にほかの文明との接触により形成されたのではないか。また、location について、前後左右に関しては animate の素性で区別しているようだが、そのような現象は他にも観察できたか。

内藤： そのような他の現象はこれまでに確認できていない。発表者からの発問になるが、基数の形態素 (10、100) はどのように分類すると妥当だろうか。例えば 2 桁の数について、20 以上に従って sa / ngaful とすると、sa が何を表すのかという問題が生じてくる。

三谷： やはり ngaful が 10 で、10 番台だけに sa がついた形になると考えるのが妥当であろう。sa がついたものを異形態として考え、sa と ngaful を分けなくてもよいのではないか。

Hansen： 英語で ten が -teen になるのに似ている。19 まではよく使うので、他と区別しているのではないか。

三谷： いずれにせよ、今の段階で決めてしまうべきではない。今後の調査、考察を待ちたい。